日本中國學會報　第七十二集
二〇二〇年十月十日　發行　抜刷

馮至の「異鄉」——散文集『山水』を中心に

佐藤普美子

馮至の「異郷」——散文集『山水』を中心に

佐藤普美子

はじめに

詩人馮至（一九〇五～一九九三）の創作は大きく三つの時期に分けられる。第一期は五四退潮期から一九二〇年代末までで、青年の憂鬱や閉塞感を平易な言葉で濃やかに表現した作が多い。奇抜な比喩を用いた「私の寂しさは一匹の蛇（我的寂寞是一條蛇）」（「蛇」）のような抒情詩や悲劇的題材の物語詩に特色がある。魯迅の「中國で最も傑出した抒情詩人」[1]という評價はこの時期の馮至に與えられたものである。約十年の空白を經たのちの第二期は抗戰期から內戰へと續く一九四〇年代である。戰時の昆明で、ソネット二十七篇を收める詩集『十四行集』（一九四二初版、一九四九再版）をはじめ、散文集『山水』（一九四三初版、一九四七再版）、中篇小說『伍子胥』（一九四六）など馮至文學の精華とされる作品が次々と生まれた。創作の根底に流れるのは、生と死、人と自然、運命と決斷をめぐる思索と詩想である。先行研究の多くがこの二つの時期に集中する。第三期は共和國成立後の五十年代で、以前の創作に見られた自省や沈思の傾向は影を潛め、社會主義時代の新事物を稱える單純明快な詩風に轉じた。この時期を代表する詩集は『十年詩抄』（一九五九）である。

近年の馮至研究では、一九四〇年代の創作を中心に、考察の對象を前後の時期に廣げ、「轉折の時代」[2]に置かれた文學者の個性にアプローチするものに特色がある。馮至に一貫する文學的精神を「絕え間ない自己否定」に見るもの（張輝二〇〇五）[3]や、自省的傾向と蛻變（脫皮）する蛇のイメージに抒情の特質を探る論考（王德威二〇一七）[4]は馮至研究の新しい視角を提供している。

本稿は四十年代の散文集『山水』を中心に、馮至が異郷の山水（人間を含む）に發見した境界について考察するものである。『山水』で描かれた西歐や中國の小さな町や村の自然と人間を、のちに馮至は「私の魂の中の山川（我靈魂裏的山川）」（『山水』後記）と呼ぶ。從來、『山水』は抗戰期の抒情的な紀行文とみなされ、『十四行集』や『伍子胥』と比べて必ずしも十分に檢討されてこなかった。[5]しかし、『山水』は異郷を「見る」態度において、リルケの影響がもっとも顯著で、また精確な觀察により「無名で平凡、單純で誠實な存在」の美を平淡な文字に表現した稀有な散文である。しかも馮至自身が自分の生命のように愛惜すると述べている。

本論はまず『山水』が生まれた背景として、一九四〇年代の昆明西南聯合大學の氣風および「復員」後の内戰時期に文學者が共有した問題を確認する。次に『山水』の散文だけではなく、時間的「異鄉」である幼年時代を回想した「幼年の物語（我童年的故事）」を通して、リルケの「見ること」の啓發に言及する。その上で、四十年代後半の岐路に立った馮至が、不安と混沌の中で散漫になる思いや考えを「整える」ために求めた時空は、この『山水』の異鄉、彼に發見と自省を促す、平凡な人と自然が織りなす質朴な境界だったことを明らかにする。

一　昆明から北平へ

馮至は八十歲を過ぎて書いた回想的文章「昆明往事」（一九八六）の冒頭で次のように述べている。

もし誰かに「一生のうちで最も懷かしいのはどこか？」と聞かれたら、私は躊躇なく「昆明だ」と答える。さらに續けてこう聞かれたとしよう。「生活が最も苦しく、思い出すと甘美なのはどこか？　しょっちゅう病氣になり、病氣が癒えるとかえって前より健康に感じたのはどこか？　本が不足していてもいっそう眞劍に讀むことを促されたのはどこか？　授業をしたり、創作をしたり、また日々の必需品のために奔走しながら、矛盾を感じなかったのはどこか？」私は次々と答えられる。「全て抗日戰爭期の昆明だ」と。[6]

一九三八年の末から四六年までの約八年間、馮至は昆明の西南聯合大學外文系でドイツ語・ドイツ文學を講じた。[7]同大は抗戰開始後、北京大・清華大・南開大の三大學の教師と學生が共に雲南省昆明に大移動した末に組織された聯合大學で、講師陣には多くの人材を擁し、まともな書籍も設備もない戰時下、分野を問わず優れた人材を輩出したことで知られている。中文系には朱自清・聞一多・羅常培ら著名な學者が名を連ね、外文系には馮至、卞之琳、エンプソン（一九〇六～八四）ら詩人にして學者の若い教師が揃っていた。國民黨の支配が比較的緩やかだったため、教師と學生が一體となって民主を求め學問を究める「聯大人」の氣風がここで醸成されていたといわれる。[8]また專門にかかわらず、教師や學生の間には詩歌を愛好する空氣が濃厚だった。當時、同大の學生だった詩人杜運燮（一九一八～二〇〇二）も、一生のうち最も印象深く、最も意義ある體驗は「昆明の西南聯大」にあったと回想している。[9]

馮至はしだいに激化する空襲を避けるため、一九四〇年一〇月から四一年一一月まで昆明金殿（楊家山）の營林場内の茅屋に移り住んでいる。授業の日は山を下り、翌朝又、授業を終えて山へ戻るという生活を送り、町にはない廣々とした空間と一面の樹木、新鮮な空氣と靜寂の中で、周圍の自然と對話する「清福」を享受したという。この體驗が彼に十分な思索の時間を與え、『十四行集』をはじめとする創作や學術研究の源泉となったことは想像に難くない。

抗日戰の終結によって一九四六年夏、馮至は家族とともに「聯大」を離れ北平に戻り、北京大學西方語言文學系に着任する。聯大で親しく行き來した友人――楊振聲、沈從文、朱自清、卞之琳、李廣田らとは「復員」後も交流が續いた。[10]彼らは民主的氣風の聯大で培われた種々の文藝活動への情熱を共有しながら、北平・天津（平津）地區の

刊行物『大公報・星期文藝』や『文學雜誌』を據點に、新しい文藝の方向をめぐる議論を展開している。姜濤によれば、一九四六年十月、楊振聲の論文「我々は活路を開かなければならない（我們要打開一條生路）」の呼びかけに對し、朱自清、李廣田、沈從文、廢名らが應じ、文學の「活路」について互いに意見を交わしている。それぞれのめざす詩や文學の方向には微妙な差異があり、例えば朱自清は鑑賞者の視點から、より積極的に朗誦詩や解放區の文藝に關心を示していたという[11]。いわゆる「京派」といわれる文學者でも、それぞれの文藝觀はひとくくりにできないことがわかる。

このように四十年代後半は、『文藝講話』の解放區延安から離れた京津地區のリベラルな立場をとる文學者たちにとっても、「活路」を開くことは單に文藝上の問題にとどまらなかった。國共內戰の混沌が續く中、彼らはまだ見えぬ社會の新しい文化や文學の方向をそれぞれの仕方で模索していた時代だったといえる。馮至もその中のひとりであったが、當時、文學の「活路」や詩の歩む方向について具體的な發言はしていない。ただ彼は一九四七年の散文「時代意識を論ず[12]」の中で、空虛な樂觀派は別として、樂觀派であれ悲觀派であれ、いずれも過渡期の不安を意識する點では同じだと述べている。さらに、岐路に立つ葛藤を文字通り「岐路」という詩（『十四行集』一九四九再版）の最終二行に「生命のあらゆる處に感じる／永遠に引き裂かれる苦痛（全生命無處不感到／永久的割裂的痛苦）」と表現している。

二　散文集『山水』の異鄕

馮至の『山水[13]』は一九三〇年から一九四四年の間に書かれた十三篇（初版は十篇）の回想性の散文を收めたもので、そのうちの九篇は抗戰期、戰火を逃れて通過した中國南方の地や昆明で書かれた。主としてドイツ留學時代（一九三〇～三五）に訪れたヨーロッパの小さな町や村での出來事、抗戰後轉々とした中國南西部の地で出會った人々や目にした自然に思いを馳せている。「『山水』後記」（一九四六）には次のように述べる。

抗戰期の最も苦しい歲月の中で、多く賴ったのはあの質朴な原野が私に與えた無限の精神の糧であった。社會の一般的現象が日に日に腐敗に向かって行く時、どんな田んぼの小さな草でも、どんな山の斜面に立つ樹でも、私にたくさんの啓示を與えた。寂しさの中、語る人もいない狀況で、それらは終始、私の向上する氣持ちを繫ぎとめ、私の生命の中にいかなる人の名言や立派な行いよりも重大な役割を果たした。……どんなに暗澹とした時にあっても、『山水』の中の風景と人物はいつも私の目の前で微かな光を放ち、私を成長させ、私に忍耐を教えた。……昆明の山水はついに私の理想の中の山水になったように思う[14]。

馮至が戰火を逃れ、南方の各地を轉々とする中で回想した場所は、生まれ故鄕や北方の住み慣れた町ではない。ドイツ留學中訪れた西歐の小さな町や村、そして必要に迫られ通過した中國南方の地とそこで出會った名もない市井の人々である。その異鄕には默々と自分の仕事を全うする人々がいて、何百年も變わらず損なわれない自然があった。馮至は抗戰期の艱難の中、その數年前に訪れた見知らぬ土地の人や自然、特に異質な「山水」に觸れた時の驚きを反芻している。これ

らの異郷は細部を想起することで、現在の意識の中に深く滲透し、「魂の山川」と化して、深く愛惜するものになったのである。

作品を具體的に見ていきたい。抗戰開始後、吳淞で書かれた二篇では西歐のこぢんまりとした閑靜な町や村を回想する。ベルリン西郊にあるアイヒカンプは松林を切り拓いて作られた新興の住宅地で、そこにはナチズムが臺頭する不穩な空氣を逃れ、靜けさと緣を求めてやって來た人々が集う。その地には境遇の異なる者が語り合い、支え合い、精神の自由を尊ぶ氣風がはぐくまれている（「アイヒカンプを懷う」[15]一九三七）。またスイス南部の都市ロカルノの村は住民が暢氣で、仕事はのろいが、愛すべき率直さがあり、よそ者にも大らかである。人、動植物のすべてが調和し、人は分を守り、怠惰なところはあっても欺瞞はない（「ロカルノの村」[16]一九三七）。

一方、戰火の中國各地にも、ふだん通り自分の仕事をし、困った人を助ける誠實な人々が暮らしている。贛江の船頭は急流の難所、暗礁の位置を知り盡くしていて、敏捷な動きで上手に舵をとり、安全に船の乘客を運んでいく（「贛江にて」[17]一九三九）。平樂の仕立屋は、工賃を倍にはずむから翌朝までに袷がほしいと賴む「私」に、閒に合わないかもしれないと言いながら、夜中までかかって仕立てた袷一枚を宿まで屆け、規定の工賃だけを受け取り歸っていく。馮至は六年續く戰爭の中で社會が變わり、人も變わる中で、變わらない事物もあることを確信したとして次のようにつづる。

> 今まさに敵は廣西の各地で猛威をふるい、デマは後方都市の士大夫社會の中に病原菌のように振りまかれている。私は部屋の中にすわり、ただ胸を締めつけられるように漓江の靜寂と平樂のあの誠實で約束を守った仕立屋のことを懷かしく思う。前者は人に深く考えさせ、後者は人の目を醒まさせる。（「平樂を憶う」[18]一九四四）。

さらに彼が思いを馳せるのは、地方の邊鄙な場所でもくもくと石窟を掘る人、人知れず燈臺を建てることに命をかけ、ひとり自然と向きあい大事業を成し遂げた者たちである（「人の大いなる歌」[19]一九四二）。馮至は彼らの仕事に對する忠實さ、熟練、粘り强さ、正直さを自分の偏見、疑念、小賢しさと對照させることでいっそうその存在を際立たせている。特に熟練と忍耐を要する「手を使う」仕事に注がれるまなざしは、創作を含む「手仕事」の意義に思い到らせ、藝術と技術の區別が大して意味をもたないことに氣づかせる。

『山水』に特徵的なのは、こうした目立たぬ場所で自らの仕事を全うする人閒を浮き彫りにした作品だが、一方に、人の一生をあたかも自然の一部のように冷靜な筆致でスケッチしたものもある。「一本の老木」[20]（一九四一）は、故郷を離れ昆明の林場で數十年閒働いた牛飼い老人の話である。老牛の死には動じなかった牛飼いも、子牛が激しい驟雨に打たれて死んでからは生老病死の順序に狂いが出たため拔け殼のようになる。故郷に連れ戻された後はまるで移植された老木のように死んでいく。「消えた山村」[21]（一九四二）は、『十四行集』と部分的にテクストを共有する詩的な散文である。昆明の山林には漢族と回族の抗爭が續いた末、七十年前に人が消えた村がある。一本の細い石の道のかすかな跡は「私」を過去へと誘い、荒々しい自然は百年前その地に生きた村人の不安に共鳴させる。

さらに毎晩荒れ狂う風はまるで一切を吹きはらうかのようだ。そんな時は荒野の直中にいるかのように、あらゆる精神上の體驗、物質的に得たものは全て意味を失う。それは海上の臺風、寒帶の雪をよぶ寒波を思わせ、自分の力ではどうしようもない。風の音がやむと野犬の遠吠えが聞こえ、その聲が遠ざかると松林が波立つ。この風の夜の遠吠えはあの時代の村落にはきっと脅威だったに違いない――とりわけ眠れない老人、眞夜中に起きてしまう子供や病氣の子を世話している寡婦にとっては。[22]

このように、馮至の『山水』には、異鄕で出會った人々の暮らしぶりへの新鮮な驚きや發見、また徹底して人間の無力を悟らせる大自然への畏怖の念、そして自らの運命を受け入れ、たったひとりで仕事を全うする人間への敬愛と感謝が溢れている。これらの「山水」はただ憧憬し融合する對象ではなく、むしろ自分とは異質で、自分の無力と矮小さに氣づかせてくれる存在である。すなわち馮至の「山水」とは決して詩趣や奇觀のある景物ではなく、ありのままの大自然や異鄕の小さな町や村の普通の人々であり、それぞれ固有だが普遍的な存在である。

馮至が『山水』に描いた異鄕は、人や自然をただ美化した境界のようにも見える。だが注意したいのは、彼が現實の異鄕體驗によって、造化の妙と調和した平凡で謙虛な存在にこそ宿る永遠の美を發見した點である。ここに見える自然や人物のほとんどが無名なのは「山水は無名であればあるほど、私たちに與える影響も大きい」[23]（「後記」）からである。人でも自然でも目立たない無名なものこそを凝視するその姿勢は、馮至を評した「平淡な日常生活の中で詩を發見する」（朱自清「詩と感覺」[24]）あるいは「平凡な事物の中に最も平凡でないものを發見する」[25]（李廣田「沈思の詩――馮至の『十四行集』を論ず」）という言葉にも通じている。

最も平凡にして最も平凡でないものを形象化した一篇として、『山水』の中では異色な物語性の散文「セーヌ河の名もなき少女」[26]（一九三二）をあげたい。同作は十九世紀後半、パリのセーヌ河で溺死した身元不明の少女のデスマスクという、西洋では普遍的な題材を用いた虛構の一篇である。青年彫刻家は少女の顏に浮かぶ天使の「永遠の微笑み」を彫ろうと試みるがことごとく失敗、その狂氣にも似た執着はついに平凡で無垢な少女を追いつめ、セーヌに入水させてしまう。結局永遠の微笑みは藝術家の作品の中にではなく、ひとりの生きている少女の顏に、あるいはその死（デスマスク）にしか現われない。同作がもっぱら描くのは微笑みを湛えた少女ではなく、それに執着する藝術家の苦惱と心理であり、結末に彼の後悔と自責の念がほのめかされる。同作は馮至の二十年代の悲劇的な物語詩の系譜に連なるものだが、同時に小說『伍子胥』へ繫がる芽を胚胎した作品でもある。他の散文とは一見異質だが、平凡なものにこそ潛む永遠の美があり、藝術家はそれを簡單には創出できないという氣づきと自省は『山水』に通底する認識である。なお執筆から六十年を經た一九九二年、死の前年、馮至は文革期の體驗と合わせて同作に言及している。[27]

馮至は『山水』に純化された「異鄕」を描く一方、四三年から四五年にかけて『生活導報』（一九四二年一一月創刊）など昆明の小型週刊誌に眼前の社會を鋭く觀察し批評する一連の雜文を書いている。[28]その多くは日常生活の身近な事例から說き起こし、當時の社會に蔓延する無責任な風潮とその根底にある粗野な考え方を批判したもので、文中

には「眞劍でない」「不注意」「なりゆき任せ」「いい加減」という言葉を繰り返し用いている。

例えば、机や急須等の日用品が「悲しくなるほど」いかに粗雑に作られているかといった小さな事から（「不眞面目」[29]一九四三）、出版物の内容と裝丁がちぐはぐなこと、時に罪悪やペテンをも容認する政治的組織に至るまで、眞面目さをことごとく無用とする世の風潮を鋭く批判する。さらにそれらの現象が全て、關わる對象への愛の缺如、物事を曖昧にする反「科學的精神」、リルケがいうところの詩人が最も憎む「差不多」の態度から生じていると分析する。馮至はこうした現象が個々の人間の内面の在り方に起因するとし、同文の最後に「物事を放任したり、取るに足りない些細なことだと考えるのは、世界の内面的破壞への道である」というヤスパース（一八八三～一九六九）の言[30]を引き警鐘としている。

『山水』の異郷―「魂の山川」は、このような不誠實が常態化する現實とは對照的な、平凡で素朴な美が「微かな光を放つ」今ここにはない境界である。馮至は單なる懐古からではなく、かつての發見と自省を現在の時空に、そして未來に存在させるためにこれらの「山水」を想起するのである。

三　リルケ『マルテの手記』の啓發――〈見ること〉

散文集『山水』と詩集『十四行集』はいわば姉妹編で、隨處に共通のモチーフが現われ、いずれにもリルケの影響がみとめられる。[31]特に馮至の愛讀書『マルテの手記』（一九一〇）の啓發は大きい。手記の主人公が二十世紀初頭の都會パリで孤獨と不安にさいなまれながらその地に存在するあらゆる物を鋭敏な感覺で、忍耐強く觀察する態度は馮至が最も影響を受けたリルケの「ものを見る」態度である。馮至は三十年代ほとんど創作をしていないが、ただ一篇、リルケ沒後十周年を記念して書かれた文章があり、『マルテの手記』の有名な一節を彼自身の言葉で語り直している。馮至の創作精神を端的に現わす部分なので引用したい。

一般に人は詩が必要とするのは情感だという。しかしリルケによれば、情感ならば私たちはすでに持っている。私たちが必要とするのは經驗なのだ。このような經驗は、佛の弟子が萬物に化身し、衆生の苦しみを嘗めつくすのと似ている。『手記』にいう。「私たちは多くの都市を見て、人や物を見なければならない。私たちは動物をよく知らなければならないし、鳥がどのように飛翔するのかを感じなければならないし、小さな花が朝開く時の姿態を知らなければならない。異郷の道、思いがけない出會い、しだいに近づく別離。――あのまだ明瞭でない少年時代の日々を思い出さなければならない。（引用省略）――しかし、もしこれらすべてを思い出せるとしても、まだ十分ではない。（引用省略）……それらが私たちの體内の血となり、私たちのまなざしや態度となり、私たち自身ともはや區別できなくなるまで待たなければならない。そうして初めてふとした時に一行の詩の最初の一文字がそれらの思い出の中心に形成され、たちまち外に現れる。」[32]（「リルケ――沒後十周年のために」）

ここで繰り返し强調される「見ること」は、外界を忍耐强く受けと

め、深く感じるという點で、受苦ともいえる受動的な姿勢である。同時に、それらを凝視しようとする點では意志的、能動的態度ともいえる。さらに重要なのは、觀察し想起するだけではなく、それら受けとめたものが自分自身の一部になった時に初めて詩が生まれるとする認識である。馮至はこれこそがリルケの詩に對する見方であり、また彼の生き方だと說明する。リルケの「詩は經驗」と述べたくだりはすでに三十年代初めに梁宗岱の詩論[33]の中でリルケの最も重要な認識として引かれている。なお、三十年代から四十年代にかけて、この認識は新詩が感傷的な抒情主義に陷ることを牽制するテーゼの役割を果たしたことが指摘されている[34]。また、「經驗」の美學概念については五四時期から三十年代にかけて、宗白華や朱光潛によって美學的檢討がなされており、特に文學藝術との關わりからこの語には豐かな內容が與えられていることは拙稿で指摘した[35]。

ここで留意したいのは、「見ること」は外界だけではなく自身の內部にも向けられることである。『マルテの手記』から馮至が引用したくだりには「あのまだ明瞭でない少年時代の日々を思い出さなければならない」という一節がある。さらに『手記』の別の部分には「僕は少年時代を求めた。再び少年時代は歸って來た。僕はそれが昔のままに重たく陰鬱であり、年をとることが何の變化も與えるものでないのを感じた[36]。」とある。

四十年代半ば、馮至は自身の幼年時代を回想した短い物語「幼年の物語[37]」を三篇書き、それらはふたたび一九四八年三月から四月にかけて『大公報・大公園地[38]』に掲載された。編集者に宛てた短い書信形式の序文には、昆明時代に夕食後しばしば自分の娘や近所の子どもに昔話をせがまれ話して聞かせたと書かれている。また大して面白味がない話でも子どもたちはそれを私以外の人間からは聞くことはできない、「なぜならそれらの物語は私自身のものだから[39]」と述べ、個人の體驗の固有性を强調する。

『マルテの手記』でも主人公が斷片的に想起する少年時代は「自己の內部に屬する自分自身にも異質で理解できない部分[40]」として、自身を生き直すための重要な記憶となっている。馮至の「幼年の物語」も同樣に、幼い當時はその出來事の持つ意味が理解できずに、ただ强い悲しみや失望そして喜びの感覺とともに深く心に刻まれた記憶である。この體驗を彼は四十年近い時間を經て想起する。いずれもごく短い話だが「生と死」「運命」「暫時と永久」「變と不變」に關わる實存的體驗というべきものが示唆されている。馮至の作品としてこの三篇はほとんど知られておらず、兒童向けの作とみなされるためか、管見の限り、取りあげられたこともないので簡單にあらすじを紹介する。

第一話「彩色の鳥」は、少年「私」が自分の住む北方の鳥が美しい色でないのが嫌で、捉まえた雀たち一羽一羽を染料で色とりどりに染めあげるが、翌朝、翼の一部分だけ赤く染められた雀一羽を殘して全て死んでしまう話。少年は父親の言葉「色のきれいな鳥が生きるのに私たちの場所はふさわしくない[41]」という言葉を初めて理解する。第二話「時計の中の生き物」は少年「私」が、音を出し自分で動くものは全て生き物だと思い込んでいたため、父の懷中時計の中には黑い小さなサソリが住んでいると信じていたという話。美しい幻想が子どもの心に與える無上の喜びは、同じ時期に執筆された「公孫大娘――『杜甫傳』副產品の二」（一九四六[42]）にも描かれている。第三話「猫目石」では指輪の猫目石と生きている猫の目の對比がモチーフになり、猫が死んだ後の瞼の下はただ灰色に塗られた泥のようなものだったという

少年の發見が語られ、生物の變化する美と鑛物の不變の美、暫時と永遠の美に關わる謎が暗示されている。

以上の三篇には、一九一〇年代の中國に生きたひとりの少年が經驗した日常のある出來事を通して、初めて知らない世界の謎に觸れた驚きと喜びが語られている。實存的問いともいえるこうした體驗は心の奥深くに長くしまわれていたものである。少年馮至の物語が『マルテの手記』で語られる少年時代と大きく異なるのは、不安だけでなく「快」が語られていること、さらに幼い「私」の傍らには、彼の世界を見守る父と母がいて、その不安や失望をただ靜かに受けとめている點である。馮至はあえて父と母を物語に配することで少年の日々の追憶に調和と安定をもたらしたのかもしれない。馮至の「幼年の物語」では『マルテの手記』に見えるような徹底した孤獨や不安の表現はない。代わりに、幼年時代にはぐくまれた美しい幻想や生死に關わる原初的體驗と、天眞な問いから發見の驚きに至る短いプロセスがひときわ鮮烈なイメージ――明るい色に染められた鳥の死、時計の中で律儀に動く小さなサソリ、寶石の猫目石と生きた猫の目の對比――によって語られている。幼年時代のこれらの物語も『山水』同樣に、リルケの「見ること」に啓發されて生まれた、馮至固有の時閒的な「異鄕」であったと考えられる。

四　「單純な心は一切を整える」

馮至はどの時期にもまとまった詩論は殘していないが、詩のことばに對する考え方は四十年代の散文の隨處に現れている。「新たな萠芽――繆弘の遺詩を讀む」（一九四五[43]）は西南聯大外文系の學生だった繆弘（一九二七～四五）の詩をとりあげ、そこに胚胎する新しい詩の可能性を語っている。繆弘は落下傘兵として從軍、終戰直前の七月に桂林で戰死した。死後、遺された詩のノートから師友が二十二首を選び印刷した小册子『繆弘遺詩』が屆き、馮至はその存在を知る。繆弘の詩が子どものような口ぶりで子どもだけが抱く望みを表現していることに、馮至は胸をつかれる。例えば「ぼくは昔この鴨たちが戰艦だったらいいのにと思った、／でも戰艦が全部鴨だったらもっといいな[44]」を引用し、どんな人の心にも響く素朴な聲だと紹介している。さらに馮至はどの詩にも豐かな枝葉の一本の樹に生長する萠芽をみとめ、その表現の特色を次のように述べている。

> 彫琢はなく、粉飾はなく、荒唐無稽はなく、空虛なわめきはなく、眞實味を缺いた誇張はなく、そして歪曲された古典やわざとらしい不自然な象徵もない。單純な字句の中に調和のとれた韻律が含まれている。[45]

馮至はこう評價した上で、「單純な心は一切を最も滯りなく整える[46]」とし、「簡單なやり方で眼前の複雜な萬象を整える[47]」點に新しい詩の趨勢と可能性を見ている。なお『繆弘遺詩』については「從前と現在――新詩社四周年のために作る[48]」でも言及しており、わずか十八歲で戰死した無名の學生詩人を彼はずっと忘れていなかったことがわかる。馮至がジッドやボルテール、キルケゴールの寸言を引きながら、「象徵派」、「形容詞」、「感傷」を否定的に捉えていることも同樣の觀點からうなづける（「詩について[49]」一九四四）。また、散漫や混亂への嫌惡は、翻譯の對象について、なじみのないものが私たちの視野を廣げ、民族の惰性をただすのであり、嗜好に合うロマン派文學の紹介

だけでは、散漫ゆえに造型する能力に缺ける民族的習性を助長することになると嚴しく批評していることからもうかがえる（「現在の文學翻譯界を論ず」[50]一九四五）。

馮至が文學表現における「素朴」「單純」を愛し、「平淡」「簡素」を尊ぶのは生來の嗜好である。もともと馮至は修辭への關心が薄く、修辭よりむしろ比喩を洗練しようする詩人である。意識的な反修辭の方法により、自分を背景に遠のかせ、感情を抑制する「觀照」という點では、周作人にも連なる美意識を持つ。深い感情と嚴肅な思想を平淡で自然な言葉で效果的に表現するためには、正確で忍耐强い觀察を必要とすることを馮至はリルケから學んでいた。

興味深いのは、馮至が詩や翻譯など文學の問題だけではなく、社會についても同樣に、混亂した社會は整理されていないためにごたごたした不潔さ、不正直に滿ちていると不快をあらわにする點である（「似て非なる言葉」[51]一九四三）。さらに「個人の地位を論ず」（一九四五）の中で、「混沌とした社會だけが個人の地位を許さない」[52]「もし混沌とした狀態を少しでもはっきりさせるようとするなら、やはり個人の嚴肅な仕事と明晰な批評を尊重するほかない」[53]と述べていることである。個人と集體の關係は對立ではなく共存にあるが、全てが混沌とした社會の中では個人の輪郭さえも不明瞭になるという感性的な把握は文學者獨特のものである。散漫や混沌をそのままにせず、曖昧なものに明瞭な形を探しあてようとするのはひろく藝術家に普遍的な志向である。しかしその藝術形式の探求を社會の仕組みのアナロジーとするのは、個人と集體、藝術と公共性の問題をあまりにもナイーブに複雜さを捨象することになる。

一方、自然から受ける啓示と人との關わりを書いた散文「二つの句」[54]（一九三五、『山水』所收）の中に、人が樹に寄りそう時、樹の精神がどのように彼の精神に傳わるかを書いたリルケの言葉が引かれ、それに對して馮至は「これは自然との融合ではなく、自然の聲息と相通じる場所に自身を配することだ」[55]と解釋している。個と全體の關係についても馮至は、大きな存在の中に自分をその一部として配置することで、個を消失し「融ける」のではなく、そこに自分を位置させることだと考えたのだろうか。それは個と個が相互に關係しあう宇宙の秩序を捉える感覺に近い[56]。

以下は『十四行集』（一九四九再版）のソネット第二十七首の最終三行で、ここにも散漫と混沌を整えようとする意識が見える。

どこに向かい私たちの思、想を整えよう？向何處安排我們的
思、想？
ただこれらの詩が風の旗のように　但願這些詩像一面風旗
捉ええぬものを少し捉えてほしい　把住一些把不住的事體。

先にも見えた「整える」（「安排」）という語は四十年代馮至の意志を集約したキーワードといえる。『十四行集』の序文[57]にも、ソネット體を用いたことについて「それは私が表現しようとするものを表現するのにちょうどよかった。私の搖れる思想を制限することはなく、私の思想を受けとりぴったりと整えてくれた」[58]と述べている。ソネット二十七首の中では「安排」の語はこのほかに第二首でも二回現れ、「安排」と類似の意味をもつ動詞は隨處に現れる。

同ソネット前半の、形のない水を捉える瓶のイメージには藝術造型

への志向を見ることができ、後半の「風の旗」には時代の過渡期に立つことを自覚する詩人の切實な歴史「感覺」が見える。秩序だった「思想」になる前のばらばらな「思、想」を「どこに向かい」「整えるのか」という問いには、四十年代後半の過渡期におかれた文學者たちに共通する逡巡と不安の情緒が含まれている。次の詩にもその焦燥がうかがえる。

一九四七年に書かれた詩「あのころ……――ひとりの中年が五四以降の數年を述懐する（那時……――一個中年人述說五四以降的那幾年）」は單行本詩集には收められなかった「集外雜詩」の一首である[59]。馮至自身の言を借りれば、第二期と第三期の間にあって、「きわめて微弱なつながりあるいは過渡的な役割を果たす[60]」數首の一つで、平明なことばの中に複雜な心情の陰影を感じさせる。五四時期というめざす明確な目標があった時代の青年だった頃の意識と、今の漠然とした形にならない不安の中に置かれる自分の意識を對照させ、「あのころ追い求めたものは／どこにあるのか」と問いかけている。

同詩は七十六行から成るが、前六十二行までに「あのころ（那時）」という語が十六回繰り返される。以下の最終十四行には、漠然とした不安と恐れ、そしてかすかな期待がほのめかされる。

いま歩むこと二十餘年、　　如今走了二十多年，
だが經たのは　　却經過
無數の岐路と別れ。　　無數的岐路與分手；
いま歩むこと二十餘年、　　如今走了二十多年，
目にしたのは　　看見了
無數の死と殺戮。　　無數的死亡與殺戮。
あのころ追い求めたものは　　那時追求的
どこにあるのか？　　在什麼地方？
いまの平原と天空は、　　如今的平原和天空，
變わらず　　依然
五月の陽光に照らされる。　　照映着五月的陽光；
いまの平原と天空は、　　如今的平原和天空，
變わらず　　依然
新たな眺望を待つ。　　等待着新的眺望。

抗日戰には勝利したが、内戰のうち續く混亂した社會の中で、文學者たちは生活の「活路」も文學の「活路」も簡單には見出せなかった。それは五四時期の青年の理想がくっきりと明確な形を持っていたのとは對照的である。「あのころ」が十六回も力強く繰り返されることで、逡巡する「いま（如今）」が對比されて浮かびあがる。形にならない理想、漠然とした不安、まとまりのない思いや考え。ただそれらをどこに向かって「整える」のかと自問した時、馮至が望んだ方向は、『山水』の「異鄉」、彼に驚きを與え自省を促す、平凡な人と自然が織りなす素朴で簡素な「微かな光を放つ」境界ではなかったか。それはつねに未來に向かって回歸する方向として意識されたと考えられる。この「異鄉」がなければ、岐路に立った馮至は「永遠に引き裂かれる苦痛」（詩「岐路」）を抱えたまま前へ踏み出すことはできなかっただろう。

注

（1）魯迅「中國最爲傑出的抒情詩人」、『中國新文學大系・小說二集』「導言」（上海良友圖書公司、一九三五年）。

（2）賀桂梅「馮至：個體生存和社會承擔」、『轉折的時代――40–50年代作家研究』（山東教育出版社、二〇〇三年十二月）は代表的論考である。なお、同著者の「”我們準備着深深地領受“：馮至《里爾克――爲十周年祭日作》」（『名作欣賞』二〇一九年第四期）は短いエッセイながら、馮至四十年代作品の閱讀體驗の核心に觸れている。

（3）張輝『馮至　未完成的自我』（北京文津出版社、二〇〇五年一月）。

（4）王德威「夢與蛇：何其芳、馮至與”重生的抒情“」、『中國現代文學研究叢刊』（二〇一七年第十二期）は何其芳と馮至の各時期のテクストに繰り返し現れるモチーフを通してそれぞれの全體像に迫ろうとする。

（5）その中で、解志熙「”靈魂裏的山川“之寫照――論馮至對中國散文的貢獻」（『文藝研究』二〇一六年第一期）は最もまとまった論考である。『山水』の諸篇を「山水詩文の傳統に反する」新しい型の現代散文だとする指摘に本稿は啓發を受けた。

（6）「如果有人問我，”你一生中最懷念的是什麼地方？“我會毫不遲疑地回答，”是昆明“。如果他繼續問下去，”在什麼地方你的生活最苦，回想起來又最甜？　在什麼地方你常常生病，病後反而覺得更健康？　什麼地方書很缺乏，反而促使你讀書更認眞？在什麼地方你又教書，又寫作，又忙於油鹽柴米，而不感到矛盾？“我可以一連串地回答：”都是在抗日戰爭時期的昆明。“」「昆明往事」の初出は『新文學史料』一九八六年第一期、『馮至全集』（河北教育出版社、一九九九年十二月）第四卷、第三四一頁。

（7）姚丹『西南聯大　歷史情境中的文學活動』（廣西師範大學出版社、二〇〇〇年五月）は西南聯大の沿革や教學制度、中文系・外文系の課程內容、文學サークルの活動から日常生活にわたり幅廣く紹介した一書。馮至については「第六章　教師個體的寫作　一．馮至：學院寫作」の中で主に『十四行集』と『伍子胥』について〈斷念〉をキーワードとして詳細に論じている。

（8）陳平原「六位師長和一所大學――我所知道的西南聯大」、『中華活頁文選（教師版）』（二〇一六年第十三期）は馮友蘭の言葉「教授學生，眞是打成一片。……那一段生活，是又嚴肅，又快活」（一九四八）を引き、同大についての回想に共通するのは「精神の愉悅」が「生活の艱難」に勝った點だとする。

（9）杜運燮・張同道編選『西南聯大現代詩鈔』「書前」（中國文學出版社、一九九七年十月）、第一―第三頁。

（10）江丕棟・陳瑩・聞立欣等編著『老北大宿舍紀事（一九四六～一九五二）：中老胡同三十二號』（北京大學出版社、二〇一一年七月）に收める馮姚平（馮至の長女）「中老胡同記事」には楊振聲や沈從文との家族ぐるみの交流が詳しく記されている。また馮姚平「五　動蕩年代中零散却深刻的記憶（一）父親藏書的祕密」（第一六六頁）には、ある日馮至の書架の後ろに隱されていた香港の雜誌を見つけ、その中の趙樹理「李有才板話」を興奮して讀んだことなど興味深いエピソードがつづられている。卞之琳は「復員」後、天津に戻るが、一九四七年九月～四九年三月まで英國オックスフォード大學に留學している。

（11）姜濤「”打開一條生路“的另外路徑――以朱自清對一九四〇年代新文藝的接受爲線索」、『中國現代文學研究叢刊』（二〇一九年第十期）參照。同論文は朱自清の「朗誦詩」體驗など抗戰以來出現した新文藝をいかにして享受したかを跡づけている。

（12）「論時代意識」、初出は『中蘇日報』（一九四七．九．二二）『馮至全集』第五卷、第三三七頁。

（13）『山水』初版（重慶國民出版社、一九四三年五月）は散文十篇を收め

る。再版本（上海文化生活出版社、一九四七年五月）は新たに「山村的墓碣」、「動物園」、「憶平樂」の三篇を加えた。

(14) 「在抗戰期中最苦悶的歲月裏，多賴那朴質的原野供給我無限的精神食糧，當社會裏一般的現象一天一天地趨向腐爛時，任何一棵田埂上的小草，任何一棵山坡上的樹木，都曾給予我許多啓示，在寂寞中，在無人可與告語的境況裏，它們始終維繫住了我向上的心情，它們在我的生命裏發生了比任何人類的名言懿行都重大的作用。……《山水》中的風景和人物都在我的面前閃着微光，使我生長，使我忍耐。……昆明的山水竟好像成爲我理想中的山水了。」『山水』「後記」（上海文化生活出版社、一九四七年五月）、『馮至全集』第三卷、第七三頁～第七四頁。

(15) 「懷愛西卡卜」『馮至全集』第三卷。

(16) 「羅迦諾的鄉村」『馮至全集』第三卷。

(17) 「在贛江上」『馮至全集』第三卷。

(18) 「現在敵人正在廣西到處猖獗，謠言在後方都市的衣冠社會裏正病菌似地傳布着，我坐在屋裏，只苦苦地思念着漓江上的寂靜和平樂的那個認眞而守時刻的裁縫：前者使人深思，後者使人警省。」「憶平樂」『馮至全集』第三卷、第七〇頁。

(19) 「人的高歌」『馮至全集』第三卷。

(20) 「一棵老樹」『馮至全集』第三卷。

(21) 「一個消逝了的山村」『馮至全集』第三卷。

(22) 「更加上夜夜常起的狂風，好像要把一切都給颳走，這時有如身在荒原，所有精神方面所體驗的，物質方面所得獲的，失却了功用，使人想到海上的颱風，寒帶的雪潮，自己一點也不能作主。風聲稍息，是野狗的嗥聲，野狗聲音剛過去，松林裏又起了濤浪。這風夜中的嗥聲對於當時的那個村落，一定也是一種威脅——尤其是對於無眠的老人，夜半驚醒的兒童和撫慰病兒的寡婦。」同前、第四九頁。

(23) 「山水越是無名，給我們的影響也越大」、『馮至全集』第三卷「後記」、第七三頁。

(24) 朱自清「在平淡的日常生活裏發現了詩」、「詩與感覺」（一九四三）、『新詩雜話』（作家書屋、一九四七年十二月）影印本（香港、新文學研究社、一九七五年九月）第一〇頁。

(25) 李廣田「在那平凡的事物裏發見那最不平凡的」、「沈思的詩：論馮至的『十四行集』」、『詩的藝術』上海開明書店、一九四三年十二月影印本（香港・滙文閣書店、一九七二年六月）第七七頁。

(26) 「賽納河畔的無名少女」、初出は『沈鐘』半月刊第十三期（一九三二年十月十五日）、『馮至全集』第三卷。

(27) 拙稿「馮至『セーヌ河の名もなき少女』のためのノート」、『九葉讀詩會』第五號（九葉讀詩會、二〇二〇年三月）。

(28) 拙著『彼此往來の詩學』（汲古書院、二〇一一年二月）第十三章「危機の〈養分〉を求めて——四〇年代抗戰期馮至の批評と學術」第三二一頁參照。雜文の分析については本稿の記述と一部重複する。

(29) 「不認眞」『馮至全集』第四卷。

(30) ヤスパース『マックス・ウェーバー——政治的思考と研究と哲學的思索におけるドイツ的本質』（一九三二）第三章「哲學者としてのマックス・ウェーバー」。馮至の引用部分の原文は邦譯（樺俊雄譯『ヤスパース選集』第十三卷、一九六六年三月、理想社）では「……些細なことだと考えるのは」と「世界の內面的破壞……」の間に「非存在の道であり」という一文が入る。なお、ヤスパースは馮至がハイデルベルク大學に提出した博士論文（一九三五）の審査員のひとりである。

(31) 李廣田「沈思的詩：論馮至的『十四行集』」は『十四行集』初版（桂林明日社、一九四二年五月）の刊行當時から同詩集におけるリルケの影響を本格的に取り上げた論文。近年では陳思和『中國現當代文學名篇十

五講』（北京大學出版社、二〇〇三年二月）所收の「探索世界性因素的典範之作：『十四行集』（上）（下）」（同書第八講・第九講）が精細かつ全面的に全二十七首を解讀し、リルケの影響を指摘する。馮至がリルケと出會うきっかけや留學當時の傾倒ぶりは、陸耀東「馮至與里爾克」（『外國文學研究』二〇〇三年第三期）に詳しい。

(32) 「一般人說，詩需要的是情感，但里爾克說，情感是我們早已有了的，我們需要的是**经验**：這樣的經驗，像是佛家弟子，化身萬物，嘗遍衆生的苦惱一般。……我**们**必須觀看許多城市，觀看人和物，我們必須認識動物，我們必須去感覺鳥是怎樣飛翔，知道小小的花朵在早晨開放時的姿態。我們必須能够回想：異鄉的路途、不期的相遇、逐漸臨近的別離；——回想那還不清楚的童年的歲月；……可是這還不够，如果這一切都能想得到。……等到它們成爲我們身內的血，我們的目光和姿態，無名地和我們自己再也不能區分，那才能以實現，在一個很稀有的時刻有一行詩的第一個字在它們的中心形成，脫穎而出。」（「里爾克——爲十周年祭日作」一九三六年一二月一〇日『新詩』第一卷第三期）。『馮至全集』第四卷、第八六頁。

(33) 梁宗岱「論詩」（一九三一）（『梁宗岱文集』第二卷、第二九頁）の中で『マルテの手記』の同じ箇所を引用するが、兩者の中國語譯には異同がある。馮至が「我們需要的是**经验**」と意譯したところを梁譯は「詩……而是經驗」とする。錢春綺譯では「它是經驗」で、現在は「詩是經驗」が譯語として定着している。

(34) 姜濤「導言早期新詩理論批評的若干問題面向」、謝冕總主編・姜濤編『中國新詩總論』第一卷「一八九一－一九三七」寧夏人民教育出版社、二〇一九年五月、第一二頁。

(35) 拙稿「民國時期新詩理論中的倫理性價値觀念——以〝同感〟與〝經驗〟爲主」、『駒澤大學總合教育研究部紀要』第十四號、二〇二〇年三月。

(36) リルケ・大山正一譯『マルテの手記』（新潮文庫、一九五三年初版、二〇〇一年改版）。第七八頁。

(37) 「向兒童說我童年的故事」（一）「彩色的鳥」（二）「表裏的生物」（三）「猫兒眼」で『中國兒童』（一九四四）に揭載された。

(38) 「彩色的鳥」は『大公報・大公園地』一九四八年三月二十八日、「表裏的生物」は『大公報・大公園地』一九四八年四月四日、「猫兒眼」は『大公報・大公園地』一九四八年四月二十七日、『馮至全集』第三卷。

(39) 「因爲這些故事是我自己的」、『馮至全集』第三卷、第四六七頁。

(40) 山崎泰孝「幼年時代の反復—リルケ『マルテの手記』における想起の詩學」（『オーストリア文學』三十卷、二〇一四年）第一六頁。

(41) 「彩色的鳥兒在我們這裏不適宜生存」、「彩色的鳥」『馮至全集』第三卷、第四六九頁。

(42) 「公孫大娘——《杜甫傳》副產品之二」初出は『大公報・星期文藝』一九四六年十一月三日、『馮至全集』第三卷。

(43) 「新的萌芽——讀繆弘遺詩」、昆明『中央日報』一九四五年十月十日、『馮至全集』第五卷、第三二二—第三二三頁。

(44) 「我曾經希望這些鴨子是戰艦，／但我更希望所有的戰艦都是鴨子。」同前、第三二二頁。

(45) 「沒有彫琢，沒有粉飾，沒有怪誕，沒有空虛的喊叫，沒有稍缺眞實的誇張，也沒有歪曲的古典與矯柔造作的象徵，在單純的字句裏含着協調的韻律。」同前、第三二二頁。

(46) 「單純的心能够把一切安排得最爲停當」同前、第三二三頁。

(47) 「以簡單的方式安排眼前複雜的萬象」同前。

(48) 「從前和現在——爲新詩社四周年作」、初出は『北大』半月刊第四期（一九四八）『馮至全集』第四卷、第一三〇頁。

(49) 「關於詩」、初出は昆明『生活導報』第三七期、「生活文藝」第五號、

『馮至全集』第五卷、第二九五頁–第二九六頁。

(50) 初出は昆明『中央日報』星期論文（一九四四．四．三〇．）『馮至全集』第五卷、第三一七頁。

(51) 「似是而非的話」、初出は『春秋導報』一九四三年九月四日、『馮至全集』第五卷、第二七二頁。

(52) 「只有一個混沌的社會才不允許個人的地位」「論個人的地位」、『馮至全集』第五卷、第二八八頁。

(53) 「若想把這混沌的狀態澄清一些，也只有尊重個人的嚴肅的工作與明澈的批評。」「論個人的地位」、同前、第二八九頁。

(54) 「兩句詩」『山水』所收。

(55) 「這不是與自然的化合，而是把自己安排在一個和自然聲息相通的處所」「兩句詩」、『馮至全集』第三卷、第二四頁。

(56) 段美喬「"工作而等待"：論四十年代馮至的思想轉折」（『文學評論』二〇〇六年第一期）は、馮至が個人と集體、個人と時代の關係を考察する際、單純に二項對立させず平衡點を見出したことが、比較的スムーズに新たな集體時代を迎え入れることを可能にしたと分析する。

(57) 「序」（一九四八年二月五日）、初出は『中國新詩』第三期一九四八年八月では『「十四行集」再版序』、『十四行集』再版一九四九年一月所收、『馮至全集』第二卷。

(58) 「它們宜於表現我要表現的事物；它不曾限制了我活動的思想，而是把我的思想接過來，給一個適當的安排。」同前、第二二四頁。

(59) 『大公報・星期文藝』一九四七年五月一日原載。『馮至詩文選集』人民文學出版社、一九五五年九月。『馮至全集』第二卷、第五頁–第九頁。

(60) 「起着極其微弱的連繫或過渡的作用」、『馮至詩選』四川人民出版社、一九八〇年八月「序」第二頁。